
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

1999. 3. 31

No. 41

サハリンアイヌの子供たち

男の子3人の額にはホホチリ（hohciri）が結び下げられている。
（本文5頁参照）

この写真は、ポーランドの民族学者プロニスワフ・ピウスツキ
が、1896年及び1902～1905年のサハリン滞在中に撮影したもの。
（ケルン市立ラオテンシュトラウホ-ヨースト民族学博物館蔵）



故児玉作左衛門博士収集アイヌ民具資料

「児玉コレクションの受贈並びに同資料の調査について」

北海道大学名誉教授故児玉作左衛門博士が収集されたアイヌ民具資料 児玉コレクションは、博士の死後、財団法人アイヌ民族博物館と市立函館博物館に寄託資料として収蔵・展示されてきたが、平成10年4月、所有者である児玉マリ氏のご厚意により、両博物館にそれぞれ寄贈された。アイヌ民族博物館が受贈したのは、イクパスイ299点をはじめとする2,275点である。

周知のとおり、博士は東北帝国大学医学部で解剖学を学ぶとともに、アイヌの人類学的研究にも深い関心を寄せられていたが、昭和4年、北海道帝国大学に赴任されるとともに、その研究も本格的なものとなり、以後、数々の論考を公にしている。

博士は、また、そうした研究と併せて、モヨロ貝塚を中心としたオホーツク文化の研究、並びにアイヌ民具の調査・研究をも盛んにし、特に晩年は、『明治前日本人類学・先史学史 アイヌ民族史の研究（黎明期）』の執筆に見るように、文献史料からアイヌ民族誌を研究されておられた。

こうした研究とともに、博士が生涯をかけて収集された資料が、「児玉コレクション」である。総数は、5,000点をはるかに超える。その全容については、『児玉資料目録』Ⅰ・Ⅱ（アイヌ民族博物館1989,1991）、『樺太アイヌ 児玉コレクション』（アイヌ民族博物館1996）、『児玉コレクション目録』（市立函館博物館1987）等で、ほぼ知ることができる。

日本国内には、アイヌ資料の個人コレクションとして、他に、馬場コレクション（市立函館博物館蔵）、河野コレクション（旭川市博物館蔵）、土佐林コレクション（早稲田大学蔵）があるが、児玉コレクションは、これらのコレクションとともに、世界でも有数の資料といえる。

因みに、児玉コレクションのアイヌ民族博物館への寄託に関わり、一つの経緯がある。アイヌ民族博物館が昭和51年に設立される前 昭

和40年に現在地において、白老観光コンサルタント株式会社の経営による「ポロトコタン」がオープンするが、それとほぼ同時期に、アイヌ民族博物館の設立者である山丸武雄が博士に将来の資料借用を願い出ているのである。すなわち、当時、すでに山丸武雄は「アイヌ民族博物館」設立構想を有していたのである。昭和59年4月21日、児玉コレクション2,312点とともに、アイヌ民族博物館はオープンするが、博士と山丸武雄の親交がなければ、アイヌ民族博物館に児玉コレクションは存在しなかったのである。

さて、アイヌ民族博物館では、資料受贈を機として、平成10年度より3年度計画で、コレクションの再調査を始めた。同コレクションは、昭和59年1月に寄託資料として借入後、計測等を行い、平成元年及び同3年に『児玉資料目録』の刊行をもって、そのデータを公にしたが、今回の調査は、先行調査の成果を踏まえ、改めて実施したものである。

初年度の平成10年度は、911点の資料（イクパスイ299点、キケウシパスイ23点、マキリ35点、エムシニブ40点、エムシシリカ80点、エムシイペ100点、セツバ114点、ニンカリ121点、衣服関係99点）について、調査した。具体的には、個々の資料の写真撮影とともに、計測、肉眼による観察 客観的特徴の把握を行い、調査資料カードを作成した。併せて、イクパスイ127点、キケウシパスイ23点、マキリ35点については、実測図を作成した。

これらの調査結果については、調査年度毎にデータベース化し、研究者をはじめとして、広くアイヌ文化に関心を持つ人々の利用に供する予定である。

なお、平成10年度の調査は、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の「アイヌ関連総合研究等助成事業助成金」を受けて実施した。

（秋野茂樹）

アイヌ古式舞踊沖縄公演

1997年7月の財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の設立とともに、同機構の助成金を受けての文化伝承・保存活動が活発となってきた。

そうした活動の一環として、2月20日、沖縄県那覇市のパレット市民劇場を会場に、「アイヌ伝統文化を知る集い」が開催され、白老民族芸能保存会が白老地方に伝わるアイヌ伝統舞踊14曲他を披露した。

本「集い」の開催の趣旨は、日本列島の北と南に位置し、それぞれ独自の文化を伝承・保存してきたアイヌと琉球民との文化交流にある。主催は、アイヌ伝統文化を知る集い実行委員会、那覇市の弁護士金城 睦氏を委員長に、詩人高良 勉氏をはじめとして、アイヌ文化に深い関心を寄せている諸氏が参集して、委員会を組織された。

「集い」は、まず儀礼の紹介にはじまり、続いてウポボ他7曲を披露して1部を終了した。2部は、冒頭、保存会会長山丸和幸が舞踊を中心として「アイヌの文化」を平易に解説し、続いて、ムックリの演奏体験を行った。その後、ムックリ演奏にはじまり、イヨマンテリムセまで、8曲を披露し、最後は舞台と客席が一体となってイヨマンテリムセを踊り、閉会となった。

本「集い」ではまた、安里フェーヌシマ保存会、国吉源次とそのグループが賛助出演し、沖縄の伝統芸能を披露した。文字通り、北と南の文化交流である。

今回の「集い」開催を通して、那覇市を中心とした沖縄県民にアイヌの伝統文化を紹介できたことは意義深いものがある。ともに独自の文化を現代に伝える民である。

公演にあたって、多くの人たちのご支援ご協力を多とした。なかでも、与儀達憲（那覇市文化振興室）、大城 學（沖縄県教育庁）の両氏には終始ご尽力を賜った。記して、感謝の意を表したい。

（秋野茂樹）



カムイノミ



ムックリ演奏体験



全員でイヨマンテ



国吉源次とそのグループ、関係者らと記念撮影

アイヌ工芸品展「テケカラペ 女のわざ ドイツコレクションから」の開催

アイヌ民族博物館では、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構との共催で、標記展示会を開催した。期間は1月31日から3月10日までの39日間である。本展示会は、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構のアイヌ文化振興事業の一つとして開催されたもので、今回で4度目である。因みに、当館を会場としての開催は、1998年の「アイヌの美・装い 土佐林コレクションの世界」展に次いで2度目である。

会の名称にもあるように、本展示会は、ドイツにあるアイヌ資料を借用しての開催で、国立ベルリン民族学博物館、ケルン市立ラオテンシュトラウホ-ヨースト民族学博物館、州立ライプツヒ民族学博物館が所蔵する資料 衣服・服飾品を中心に79点（ベルリン＝48点、ケルン＝15点、ライプツヒ＝16点）を陳列した。

開会に先立って、博物館内ポロチセにおいて、博物館職員により、展示会開催期間中の無事故を祈願するカムイノミを実施した。初めての試みである。引き続いて、同ポロチセで開会式が、博物館前でテープカットが順次行われ、展示会がオープンした。

今回陳列した資料のなかで注目を集めたものに、ホホチリ（＝額飾り：ケルン市立ラオテンシュトラウホ-ヨースト民族学博物館）、ラプル（＝鳥羽衣：州立ライプツヒ民族学博物館）、イナウカサ（＝帽子：国立ベルリン民族学博物館）などがある。ホホチリは、サハリンアイヌが用いた男児用の額飾りで、世界で2点の現存が確認されている。ラプルは、水鳥の皮を縫合した衣服で、本資料は保存状態がいい。日本国内にも数点あるが、状態はよくない。イナウカサは、サハリンアイヌの男性用の帽子で、飾りと補強を兼ねて鯨髭を板状にして用いている。これらの資料は、いずれもつくりや素材に大きな特色を見せており、アイヌ文化の深さを知ることができる。

なお、今回借用・陳列した資料のうち、イナウカサをはじめとして33点の資料は、1997年



カムイノミ



展示風景



展示風景

に東京国立博物館で開催された特別展「アイヌの工芸」で陳列されている。

周知のとおり、ヨーロッパでは、早くからアイヌへの関心が高く、18世紀末から19世紀初頭において、クルーゼンシュテルンやリントナーらによってアイヌが詳しく紹介されている。

また、19世紀後半になると、アイヌに対する人類学的関心が高まりを見せている。こうした動きとともに、アイヌの物質文化もまた注目されることとなり、骨董商をはじめとして、研究者や一般の旅行者など、来日した多くのヨーロッパの人々がアイヌの民具を収集している。

こうして収集された資料が、現在、ドイツを中心としたヨーロッパの各博物館に収蔵されている。これらの資料は、収集年代からして相当古いものが多く、日本国内にある資料の多くが昭和に入ってからのものであることからしても、大変貴重な資料であることがわかる。

アイヌ文化法の制定と相俟って、アイヌ文化の伝承・保存活動が活発に行われている現在、改めて古い時代の資料に触れ、そこにある文化を知ることにも大いに必要と思われる。今回の展示会の開催はその一助となったものと確信している。

最後に、本展示会の開催にあたっては、多くの人たちにご協力いただいた。なかでも、東京国立博物館佐々木利和氏には終始一貫してご指導ご協力を賜った。また、ボン大学クライナー・ヨーゼフ博士、オイルシュレーガ博士、ハイデルベルク大学若林操子氏、同大学日本学研究室にも多大なるご支援ご協力を賜った。記して、深甚なる謝意を表する次第である。

(秋野茂樹)



ホホチリ (額飾り)



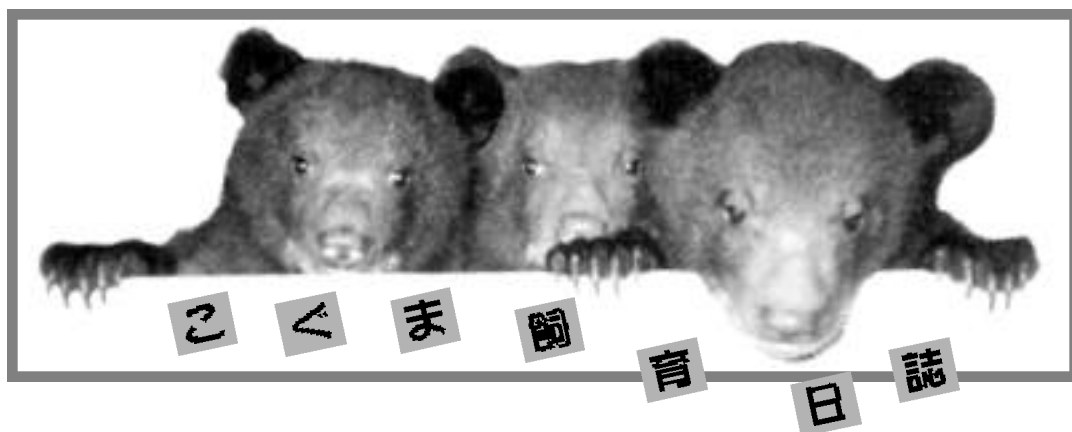
ラブル (鳥羽衣)



アットゥシ (樹皮衣)



イナウカサ (帽子)



1月29日午後4時30分、「子熊三兄弟」はやってきた。

初めての長旅の疲れもみせず、元気な鳴き声をあげている「子熊三兄弟」は、今年1月上旬（推定）、日高山中で生まれ保護された、雄2頭、雌1頭の野生の子熊である。

子猫のような小さな体、目もまだ開いていない。まるでぬいぐるみが動いているようだ。

野生であること、出生地が明確であること、尚かつ三兄弟であることなど、学術的にも大変貴重な三兄弟とのことで、のぼりべつクマ牧場の前田菜穂子学芸課長にご指導いただきながら、24時間体制の「子育て」の始まりである。

まず、ミルクの調合、飲ませ方、そして排便のさせ方など、母親のような育児教育を受ける。ミルクは、市販の（人間用）乳幼児用調製粉乳を使用した。（DHA、オリゴ糖、ヌクレオチド、-カロチン配合、さらに、カルシウム強化の新発売である。）150mlの哺乳壺に専用スプーンで3～4さじ、クマさんの大好物である蜂蜜を小さじ半杯、ミルクの温度は、母熊の体温が高いとのことで、人間の乳幼児よりやや高めとした。

また、食事（ミルク）の前に必ず排便をさせるよう前田課長に指導を受け、お尻のあたりをトントンと刺激するのだが、子熊が泣いて暴れることもあり、思うようにいかない。一頭でも大変なのに三頭もいるのだから、なお大変、最後はウンチだらけである。

飼育小屋の室内は、常に28～30度に保ち、飼育担当の塩田知治当館職員を中心に、一日4回、5時間おきにこれを繰り返した。

塩田職員の日誌によると、1月29日にあった鼻と両前足の擦り傷（雄1頭・雌1頭）は、2月10日には完治、薬は一切使用していないとある。熊の脂は擦り傷に効くと聞いたことがあるが、改めて野生の力に驚く。

2月15日からは、飼育小屋の室内温度を25～28度に下げ、環境を少しずつ変化させた。

さらに、50日めには雄の子熊（赤毛）が場所を決め、自分で排便するようになった。ミルクも250ml哺乳壺となり、専用スプーンで5～6さじ、蜂蜜も小さじ1杯と食事の量も増え、順調のようだ。

3月に入ると、兄弟喧嘩の回数が増えてくる。とくに食事時が激しく、顔に生傷が絶えない。兄弟といえども生きるための本能を強く感じる。

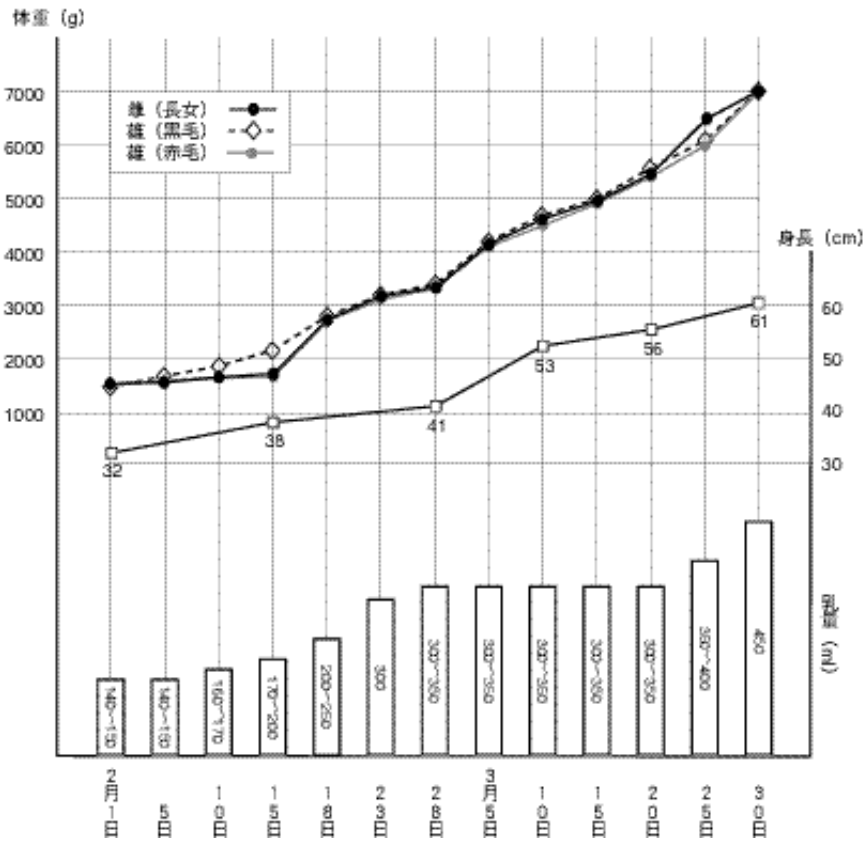
この頃になると、性格の違いも見えてきたようだ。塩田日誌によると、一番気の強いのが雌（長女）、次に黒毛の雄、性格がよくお人好しが赤毛の雄となっている。

体格もそうだが、今後、性格についても興味深く観察していきたい。

以下、1月29日から3月30日までの体重、身長（鼻から尾までとした）、食事（ミルク）量の推移を、塩田職員の日誌から拾った（右グラフ）。

なお、三兄弟の名前については、公開を予定している4月中旬以降、来館者よりの一般公募で決定し、発表したい。

（中村 宏）



アイヌとヒグマ

アイヌの世界観では、この世はアイヌ(人間)とカムイ(神)がいて成り立っていると考えられてきた。カムイは、神の国では人間と同じ姿をしており、人間の国へ降りる際、動物や植物などに姿を変えてやってくるものとされる。

ヒグマも、キムンカムイ(山の神)のこの世の姿として、アイヌに毛皮や肉を土産にやってくる、たいへん位の高い神とされてきた。

イヨマンテの名で知られる熊の霊送りは、1~2年育てた子グマを神の国へ送り帰すもので、神の再訪を願いおこなわれる儀式である。毛皮や肉のお礼に花矢やイナウ(木幣)、宝物や酒、ご馳走を持たせ、神と人間とともに宴を催し、人間の国の楽しいところを他の神に伝えてもらい、より多くの神が人間の国へ訪れるようお願いするのである。

(村木美幸)



木戸竹石「アイヌ熊狩之図」(アイヌ民族博物館蔵)

博物館短信

アイヌ工芸品展（共催事業）

期間：1月31日～3月10日

事業名：アイヌ工芸品展「テケカラペ - 女の
わざ ドイツコレクションから」

共催：(財)アイヌ文化振興・研究推進機構

- * ドイツの3博物館が収蔵するアイヌ民族資料から、衣服を中心に79点を展示。開幕初日には式典に続いてアイヌ文化講演会を開催、ボン大学教授クライナー・ヨーゼフ氏が「ドイツのアイヌ観とアイヌ文化コレクションの歴史」と題して講演を行った。（2～3頁）

日胆地区博物館等連絡協議会博物館職員研修会
（主管事業）

期間：3月5～6日

主催：日胆地区博物館等連絡協議会

- * 「博物館における体験学習について」を研修テーマに、当館のムックリ製作体験を含む実践報告等を行った。

展示協力

(財)福岡県人権啓発情報センター特別展「先住民アイヌの人々の今」

期間：12月1日～1月31日

貸出資料：民具資料49点

「日本きもの博覧会」

期間：2月6～9日

主催：名古屋市東海呉服振興組合

会場：愛知県産業貿易会館（名古屋市中区）

貸出資料：衣服・装身具44点

講師派遣

帯広百年記念館アイヌ文化セミナー

期日：1月17日

演題：「アイヌの霊送り イヨマンテを中心に」

講師：秋野茂樹（学芸課長）

苫小牧市博物館大学講座

期日：1月16日

演題：「アイヌと植物」

講師：安田千夏（学芸員）

白老民族芸能保存会公演

「アイヌ伝統文化を知る集い」

期日：2月20日

主催：アイヌ伝統文化を知る集い実行委員会

会場：パレット市民劇場（那覇市）

出演：白老民族芸能保存会会員15名

演目：古式舞踊14曲他（5頁）

新刊

『テケカラペ - 女のわざ ドイツコレクションから』

1月31日発行 A4判108頁 頒価1,500円

- * 同展図録。クライナー・ヨーゼフ、児玉マリ（当館学芸員）の小論を付す。

伝承記録4『川上まつ子の伝承 植物編1』

3月31日発行 B5判317頁 頒価1,500円

- * 沙流地方の伝承者故川上まつ子氏が遺した音声資料145点の中から、107種の植物及び関連項目を整理。近現代における沙流アイヌの植物伝承を研究するうえでの基礎資料。

平成10年度入館者数

4月	18,439	10月	58,563
5月	42,428	11月	24,812
6月	57,058	12月	11,575
7月	52,574	1月	9,157
8月	43,809	2月	27,607
9月	50,594	3月	10,672
		計	407,288

アイヌ民族博物館だより No.41

発行：財団法人アイヌ民族博物館

〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4

TEL：0144-82-3914

FAX：0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 1999. 3. 31

印刷：株式会社北海道機関紙印刷所

〒006-0806 札幌市北区北6条西7丁目

TEL：011-716-6141

FAX：011-717-5431